朝日新聞　夕刊　2011年（平成23年）３月２日
Asahi shinbun [evening paper] 2nd Mar. 2011

新　聞　（夕刊）　第3種郵便物認可

人間国宝の技に迫る

映画「文楽　冥途の飛脚」30年経て公開

1979年に文楽の舞台を撮影した映画「文楽　冥途の飛脚」（マーティ・グロス製作・監督・編集）が5日～4月1日、東京・恵比寿の東京都写真美術館ホールで上映される。故人の竹本越路大夫や吉田玉男ら人間国宝が多数出演したが、撮影当時に国内で一般公開されなかった貴重な映像だ。

（小山内伸）

「文楽　冥途の飛脚」から。玉男の遣う忠兵衛（左）と簑助の梅川　=Ian Buruma氏撮影　©Marty Gross Film Productions,Inc.

美のマジック　カナダ人監督撮る

マーティ・グロス

カナダ人のグロスは、陶器など日本文化に関心を持ち、70年に初来日した。大阪・朝日座で文楽を見て海外に向けた劇映画を構想。楽屋を訪ねて一人ひとりを説得し、先輩格だった越路大夫の協力を取り付けて製作が実現した。

グロスは「文楽の演劇的技術に興味を持った。あの美しさはどういうマジックで作り出されるのか。大きな人形を3人もの人形遣いで動かす様式は世界でも類がない。浄瑠璃、三味線、人形が一体となる時が素晴らしい」と語る。

撮影された文楽「冥途の飛脚」は近松門左衛門の作。飛脚問屋の跡継ぎ養子忠兵衛（玉男）は遊女梅川（吉田簑助）と恋仲だが、梅川が他の客に身請けされそうになったため、友人の金を無断で借用、さらに公金を横領して梅川を身請けする。2人は忠兵衛の故郷に逃げるが、すでに詮議の手が回っていた。

「人情ものなので海外にもわかりやすい。腹切りなどのエキゾチシズムは避け、いいストーリーを選んだ。物語が大事なので、人形と音楽、字幕のペースが一緒になるように工夫して撮影した」

出演はほかに、大夫が竹本文字大夫（現・住大夫）、織大夫（現・綱大夫）。三味線が五世鶴沢燕三、四世野沢錦糸、鶴沢清治。人形が簑助に加え、二世桐竹勘十郎、吉田文雀と、後に人間国宝となる演者が勢ぞろいしている。

京都・太秦の撮影所に舞台セットを作って撮影した。米国など海外のテレビや映画館では放送・上映されたが、国内ではオファーがなく上映されなかった。

デジタルリマスター版で、日本語字幕を付した。「30年も前の作品を、新しい世代に見てもらえるのはうれしい」

フランス・ブリュッヘンが

第8番も面白かったが、特